

# έποχή & bilingualism

## —待つこと、そして、見守ること

馬 場 良 二

夏休み前に、講話を頼まれた。2005年10月20日、熊本市立黒髪小学校で、題目は「共にいきるための国際理解について」だ。

日本には、文部科学省の管轄で、日本語教育を必要とする児童、生徒のための事業、「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」という事業がある。文部省の時代には、「外国人子女教育受け入れ推進地域」という名称だった。熊本市では、教育国際化推進連絡協議会を設け、この事業に参加し、黒髪小学校を「地域」の「センター校」に指定している。センター校では、日本語教育を必要とするこどもたちが在籍している小学校、中学校のクラスの担任の先生方を対象とする「在籍学級担当者会」という会が持たれる。その会で話すのだ。

二つ返事でひきうけた。というのは、集まってくる担任の先生方はもちろんのこと、連絡協議会のメンバーでさえ、日本語教育の専門家だと言うが、一体何者なのだろうと思っているに違いない。私がどんな人間で、どんなことを考えて、この場にいるのか、言おうと思ったからだ。会に集まるのは30名ほどだが、その中で、直接こどもたちと接していないのは私だけだ。平成11年から連絡協議会のメンバーだが、ずっとひげ目を感じていた。居場所がない。落ち着かなかった。

大人に対する日本語教育ならいくらでも話すことはあるが、子供たちのための教育では、話せることはない。こどもたちのための教育では、先生方がプロフェッショナルなのだから。それでも、引き受けた。

平成元年に熊本女子大学文学部に赴任して、日本語教師の養成をしている。学部はポルトガル語で、いくら勉強して、考えても、ポルトガル語ネイティブがこうですよと言ったら、そうですか、で、議論の余地はない、考える余地もない。2年の時に、「日本語学概論」という講義を受け、日本語なら自分で考えられることを知り、日本

語と言語学とに興味を持った。就職したくないからという消極的な理由で日本語学の大学院に進み、修士を終えた後、恩師から日本語学校での職を紹介され、働き始めた。バブルの真っ只中だった。新宿南口から歩いて通うその学校は、国際的に有名な服飾専門学校と同じ学校法人で、できて2年目だった。毎年、学生は倍々に増え、その頃、市販されている教材は不十分で、教材を作りながら授業に入っていた。きびしい職場だった。

進学を目指した留学生に、1年、あるいは、1年半の間、集中的に日本語を教える予備教育から、一転して、日本語教師の教師養成に移った。日本人を教えるのは、アルバイトの塾以来だった。赴任して何年目かに、熊本市の教育委員会に委嘱されて、日本語教育を必要とする児童、生徒に日本語を教えているという「日本語指導員」の女性が、英文科に社会人入学してきた。行政の怠慢と制度の不備を訴える。そのうち、私の研究室の学生が市内のいくつかの小中学校で行なわれていた日本語の授業を手伝うようになった。平成11年に、「外国人子女教育受け入れ推進地域」の指定を受け、私は教育国際化推進協議会の委員となり、黒髪小学校をセンター校として、児童、生徒に対する熊本市の日本語教育は、制度化され始めた。2000年の春休みに黒髪小学校で日本語教室を企画、運営し、2003年からは教師養成の実習の場とした。

熊本市のこどもたちのための日本語教室と少しずつ密接な関係になり、いろいろなことを勉強させてもらった。

講話を頼まれたのは第1回在籍学級担当者会の時だった。小学校低学年の児童で、日本になれない場合は、教師の方が困ってしまう、と言う。具体的な話を聞いたのは、夏休み前の飲み方だった。教育国際化推進協議会のメンバーが集まった。黒髪小の加配の先生方、市の教育委員会の旧担当者と新担当者、日本語指導員、そして、私。のどを潤し、人心地ついたころ、黒髪小の校長が話し出した。その日、下駄箱の前で、中国から来た新入生が笑顔で話しかけてくれたと言う。その少女は初めての授業参観の日、突然帰ると騒ぎ出し、押し止めようとするとうパニックにおちいった。日本語のわかる中国からの上級生を呼んできて話を聞くと、中国では授業参観という制度がなく、後ろに並んでじっと見ている大人たちは私をさらいに来たのだ、今すぐ私は親の元に帰らないといけない。そんなことはない、あれはみんなクラスの子供たちのお父さん、お母さんで、あなたを連れ去ったりはしない。本人はおびえ、周囲は驚いた。その少女が、先生、と声をかけてくれたのだと言う。

もう、「最近」という言葉は似つかわしくなくなってしまったかもしれないくらいの最近、言語教育の世界では「エポケー」ということは、概念が注目を浴びているらしい。日本語では、「判断保留」と訳され、もともとは古代ギリシャの哲学用語だ。現代の教育の世界では、混乱にある時こそいいとか悪いとか、本当だとか嘘だとかの判断をせず、それはそうなのだ、と、ひとまず現実をそのまま受け止めておこう、という考え方をさすようだ。

“A Greek-English Lexicon”の‘ἐποχή’の項を見ると、‘check, cessation’と訳がふられている。「妨害、阻止、停止」、「中止、休止」ということである。用例、語義説明はI、II、IIIの三つがあり、そのIIの1.には‘Philos.’の略号のあとに、‘suspension of judgement’の訳がある。「判断の延期」だ。また、大学書林『ギリシア語辞典』の「ἐποχή」の記述は「押し止めること、妨げること；〈哲〉判断停止；〈占星術における天球図上の星の〉位置。」であり、ここでは「判断停止」の訳があてられている。

ギリシア語の「ἐποχή」はドイツ語では「Epoche」である。小学館『独和大辞典』には「《哲》エポケー、判断中止。[gr.; <gr. ep-échein „fest-halten“]とある。ここでの訳は「判断中止」であり、ギリシア語の語源の説明がドイツ語でつけられている。‘fest’は「堅く、しっかりと」、「halten」は「保持する」といった意味だ。

語の意味ではなく、概念の意味するところを見よう。平凡社『世界大百科事典』には、

**エポケー Epoche** 古代ギリシアの懐疑派（ピュロンを開祖とするスケプシス派）の用語で、〈判断中止〉〈判断さしひかえ〉の意。懐疑主義の立場から彼ら懐疑家たちはストア派などの独断論に反対し、人が理論的にも実践的にも誤謬（ごびゅう）や煩惱（ぼんのう）から脱却して心の平静を保つためには、なにごとについてもそれをそうであるともないともきめず、真とも偽とも善とも悪とも断定しないことに努め、いっさいの価値判断から超然たるべきだとした。なお、フッサールはエポケーを現象学の方法の一つとした。

とある。もともと、古代ギリシアの哲学の用語で、物事の受け取り方、認識の仕方、考察の方法論であり、のち、フッサールによって現象学に取り入れられたことが分かる。今日の教育学には、この現象学から取り入れられたのだろう。

『岩波 哲学・思想辞典』には、

エポケー 【独】 Epoche 「中止、抑制」の意のギリシア語 epochē に由来する。古代の懐疑主義の実質的中心概念。現代の現象学にとっては方法的基礎をなす。

さらに、

フッサールの現象学において〈現象学的（超越論的）エポケー〉は、自然的態度から現象学的態度へと態度変更するための操作を意味し、この限りでは〈現象学的還元〉と同義である。フッサールによれば、自然的態度における一般定立（普遍的な存在信憑）のスイッチを切り、対象に関する存在措定を「遮断し」、その存在性格を「括弧にいれる」ことがエポケーであり、それによって純粹意識の領域もしくは、正確にいえば「世界と世界意識との普遍的相関関係」という新たな探求領域が開ける。

とある。フッサールの現象学にとってはかなり重要な概念のようだ。

教育学ではどのように定義されているのか、『新教育学大辞典』をしてみる。

**現象学的教育学** (英) phenomenology of education, phenomenological pedagogy (独) phänomenologische Pädagogik (仏) pédagogie phénoménologique

「現象学」は「事象自身へ！」Zu den Sachen selbst! と定式化される一つの格率を表す、とされる。素朴にいえば、「物事を、偏見を持たず、ありのままに見るべし」という格率である。しかし、実は、これほど困難な課題はない。なぜなら、我々は常に自ら自明としてしまっている「偏見」や「先入見」を通して物事を見ているからである。そのため、「事象自身へ！」は、まず、我々が自明としている偏見や先入見のはたらきを停止する「判断停止」「現象学的還元」への努力に始まることになる。

古代ギリシア哲学の ἐποχή は現象学を経て、教育学に受け継がれていった。そして、日本語教育へ。『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』には、

エポケー …………… <sup>ほんだんていし</sup>判断停止、<sup>ほんだんほりゅう</sup>判断保留

カウンセリングの手法でクライアントがどのような枠で物事をとらえ、認識しているかを共感的に理解するために必要なリスニングの姿勢を言う。不確実で予測が

難しい状況や、自分と異なる枠で物事を認識する人と接するとき、相手を知りながらコミュニケーションをすることに役立つ。具体的には、相手の話を聞いて自分が受け止めたことを、自分の判断は留め置きながら、相手に返すことによって確認をする。このとき、質問や決め付けをしないで、自分の受け取り方が良かったかどうかを共感的な気持ちで確かめることが大切である。これによって、話し手は否定や批判をされないので安心して話すことができ、共感的な確かめによって話を真剣に聞いてくれたと感じることができると考えられる。また、自分の気持ちを整理したり、問題点や不安を整理しやすくなる。異文化コミュニケーションの場面でも、意見やアドバイスを言う前に、文化的なギャップが存在するかもしれないような解釈や判断を保留しながら相手の話をよく聞く姿勢が必要である。

哲学辞典には「どれが真かを決定する探求の試みを控える」とある、何も「リスニングの姿勢」に限ることはない。

「相手の話を聞いて自分が受け止めたことを、自分の判断は留め置きながら、相手に返すことによって確認をする。このとき、質問や決め付けをしないで、自分の受け取り方が良かったかどうかを共感的な気持ちで確かめることが大切である。」、これこそ「コミュニケーション」だ、「意思疎通」だ。腹芸だ？「言わなきゃ分からないのか！」なんて、ナンセンスだ。言わなくて誰がわかるんだ。日本社会に限らず、どこでだって、言わなくても通じることはある。だが、日本はひどい。言わなくても分からなくてはいけない、だと。

「話し手は否定や批判をされないので安心して話すことができ、共感的な確かめによって話を真剣に聞いてくれたと感じることができると考えられる。また、自分の気持ちを整理したり、問題点や不安を整理しやすくなる。」、カウンセリングの基本だ。相手の言ったことを繰り返す、鸚鵡返しにする、こと。まさに、「カウンセリングの手法」である。

私の家内は韓国人で、食事の時、いすの上に片ひざを立てて座る。韓国女性の正座は床の上で片ひざを立てる。娘が1年生の時、給食で片ひざを立てていたそう。先生は、軽くそのひざをたたいた。娘と家内にとっては、少なからずショックだった。親がしつけをしておくべきだった、また、家内にもっと説明しておくべきだった。と同時に、教師はそこで判断をくださずに、「どうしてだろう？」と考えるべきだった。夏休みの日本語教室を見に行ったら。エキゾチックな顔をした女の子が耳にピアスを

している。日本の小学校ではちょっと驚く。その子の国では、女の子は全員、生れてすぐにピアスをつけ、一生はずさないのかもしれない。もしそうなら、そういう習慣を知っていたなら、驚くにはあたらない。子どもたちに説明がつく、納得させられる。

人間には言語形成期というものがある。一般的に、4歳から10歳ぐらいまでの間に言語能力が形成されるという。

我々が外国語を学習するのは実につらい。血のにじむような努力をしても砂上の楼閣、気がつくとは何も残っていない。第2言語を習得するのでさえストレスが大きいのであるから、言語というものを身に付けていない子どもたちが脳のシナプスを一つ一つつなげ、言語という抽象物を構築していくのは偉大な作業というほかない。

結婚した当初、家内との会話は片言の英語だった。それが、産院に1週間いて、帰ってくると日本語を話すようになっていた。が、まだ不十分で、娘にどう話しかけたらいいか迷ったこともあるようだ。不正確な日本語より、母語である韓国語を使うよう言った。母親は韓国語で語りかけ、父親と周りの環境は日本語ということになった。言語そのものを構築していく際のインプットが二か国語、ダブルである。娘のストレスはたいへんなものだったろう。二言語併用というのは、10歳までは、言語習得にとってマイナスらしい。一つの状況に言い方が二つというのは混乱する。が、10歳をすぎるとプラスに転じるという。10歳ごろに言語能力が安定するのだ。

11歳の時、娘に聞いたことがある。一年生の頃、子どもたちみんなに言ったことなのにお前だけがわかっていないことがよくあると先生が言っていた、と言うと、幼稚園の頃もそうだった、みんなが砂場に集まってるのに私一人だけわからなかった。おぼえてるの？ おぼえてるよ、ひどかった。何にもわからなかった。

うちの子供たちは、3人ともに裸が好きで、長女も小学生低学年の頃までは家の中で裸だった。それでも、幼稚園の年中さんの頃から、ものごころがつく頃から、人前では裸にならなくなる。人前で裸になるのは恥ずかしい、という文化、習慣が身についてくる。文化の受容、習得も10歳ごろには安定し、小学校高学年であれば、日本は自分の国とは違うからと頭で納得できるかもしれない。が、低学年であれば、頭でわかることもむずかしい。身についたばかりの文化、習慣を引き剥がすことになる。それは酷だ。日本の教室に合わせさせるために、説明はもちろん必要だが、その前に、とにかく待つてやらなくちゃいけない。片ひざをたたく前に、なぜだろう、ピアスを注意する前に、どうしてだろう。

誰でも不公平はいやだ。

ある日、外国から新入生が来た。その新入生の国のこと、ことば、文化を知らない、というのはしかたがない。我慢してもらうしかない。が、それを知ろうとしない、知りたがらない、としたら失礼だ。その子は、日本のこと、ことば、文化を知ろうとする、知らなきゃならないのに、周りはまったく興味を示さない、としたら、腹を立てて当然だ。

きのうまでそうしろと言われ続けたことを、言われたままにやってるのに、否定されたら苦しいに決まっている。

外国人児童、生徒、とくに低学年の場合、本人、担任だけでなく、同級生、そして、保護者も、まずは待つこと、見守ること。同級生と担任、クラス全体で理解するよう努力しよう。ことばを覚える、歌を歌ってもいい、その子の文化を知る努力をしよう。保護者と話をする時間を設け、落ち着くまでは待つしかない。

国境を越えた共生社会である。とりあえず見守ること。それから、こちらの方から歩み寄ろう。入ってきた方が歩み寄ればいい、というのではなく。

#### 参考文献

A Greek-English Lexicon, 1996, Oxford

大学書林『ギリシア語辞典』1989

小学館『独和大辞典』1998

『世界大百科事典』1981、平凡社

『岩波 哲学・思想辞典』1998、岩波書店

『新教育学大辞典』1990、第一法規出版

『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』2004、アスク